九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

The New English Bibleの翻訳に見られる矛盾構造について : 最近の聖書翻訳論争から

木原, 範恭
近畿大学

https://doi.org/10.15017/2231591

出版情報：九州人類学会報. 5, pp.12-15, 1977-12-15. Kyushu Anthropological Association
バージョン：
権利関係：

The New English Bibleの翻訳に見られる矛盾構造について

〜 最近の聖書翻訳論争から 〜

近畿大学　木原範恭

はじめに

本稿において　日本語訳聖書の問題点と新英訳聖書（·ＮＥＢ）との矛盾構造の共通性について、主として分析を試みてみたい。一般に聖書翻訳の論争の原点にまでさかのぼって考えてみると、神のコトバとしてのキリストをどのように追い求めているかという翻訳者の信仰のあり方こそ一番の問題点であると思われる。即ち、かかる翻訳の矛盾点は、パトス性を無視して、聖書の書かれた原初的感動を消去しているばかりではなく、残念なことには、ロゴス性まで無視していることにある。有機体的集合体としてのバイブルのuniformity（統一）とunity（一致）まで無視し、終局的にはロゴス（ヨハネ１：１）としてのメシヤとしてのイエス・キリストの解釈が弱められている。

聖書について

詩篇１０３篇の１節２節などの日本語新改訳聖書などはパトス性を無視した翻訳といえる。この１０３篇の１節，２節は、「ほめよ。わがたましい、イヘイウエイを。またわがうちにあるすべてのもの、その聖名を。　ほめよ、わがたましい、イヘイウエイを。そしておまえはそのすべての報いを忘れない。」と直訳されるところである。

新改訳は、「わがたましいよ。主をほめたたえよ。私のうちにあるすべてのものよ。　わがたましいよ。主をほめたたえよ。主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな。」となっている。石浜義則氏はこの矛盾を指摘して次のごとく述べている。「この二つの文を比べますと、原文は活々とした詩情のほとばしるままに命令語、名詞、形容詞、短文などがあたかも機関銃から飛び出す弾丸のように粗野に、不規則に、すばらしい形で感動的に書かれています。

たとえば、１，２節では『ほめよ』、『ほめよ』が、力強く始めに叫ばれています。詩というものは、心が神の恵に感動して、制し切れなくなったとき、さんびと感謝の激情が爆発的に叫んだのを書いたものです。ところが新改訳では「わがたましいよ、主をほめたたえよ」「わがたましいよ、主をほめたたえよ」といとも静かに書かれ、「ほめたたえよ」が「わがたましいよ」と「主を」の次に、つまり最後に、いとも弱く、気の抜けたように書かれています。もはや感激も感動もない、静かな力の抜けた言となっている。」　詩篇１１７篇などの新改訳聖書などもこのカテゴリーにあてはまる。即ち、「すべての国々よ。主をほめたたえよ。すべての民よ。主をほめ歌え。その恵み

は、私たちに大きく、主のまことはとこしえに至る。ハレルヤ。」　これは直訳すれば、「讃えまつれイヘイウエイを　もろもろの国々　たたえまつれ　もろもろの民　そはおほいなり　われらへのその恩寵　神の真実　とこしへに　ハレルヤ」となるところである。

散文的な事例としては、箴言７章１節などがあげられる。「わが息子よ、守れ、わが言葉を。」（私訳）となって、わが息子よと最初によびかけの言葉が来る。ＮＥＢ訳が特に問題となるのは、同１０３篇の３，４，５，６節の訳で、これは新改訳と同じく単調な動的翻訳となっている。

ＮＥＢ訳は、

3. He pardons all my guilt and heals all my suffering.（彼は私のすべての咎をゆるし、私のすべてのわずらいをいやす）

4. He rescues me from the pit of death and surrounds me with constant love, with tender affections;
（彼は私を死の穴から救い、変らない愛といつくしみをもって私をかこむ）

5. He contents me with all good in the prime of life, and my youth is ever new like an egle's.
（彼は私に壮年期をすべてのよいもので満たされる。そして私の若さはわしのそれのようにいつも新しい。）

次に聖書原典に忠実であることをモットーにした石浜義則氏訳をとりあげてみたい。

3. The forgiver for all thine iniquities.
The healer for all thine diseases.
（おまえのすべての咎のための赦す者。おまえのすべての病のための癒す者。）

4. The redeemer of the life from pit.
The loving kindness and tender mercies crowner of thine.
（穴からおまえの命を置い戻す者。あわれみといつくしみをおまえに冠らせる者。）

5. The satisfire of the perpetuity with goodness.
The youth is renewed like eagle.
（良いものでおまえの一生を満たす者。おまえの若さはわしのように新らしくなる。）

ＮＥＢも日本語新改訳聖書も、神こそすべてのすべてと強調しようとしたかも知れないが、かえって単調になっている。ダビデは詩篇１０３篇全部を神を讃美する歌として書いたのであるから、讃美にふさわしい文体に訳されてしかるべきではなかろうか。

石浜義則氏はこの讃美にふさわしい文体を次のように定義している。

「３，４，５節ではイヘイウエイが赦す者、癒す者、買戻す者、冠らせる者、満たす者として五

つの業を次々と行われるように書かれています。言いかえますと、原文では、山、滝、溪流、奇岩森、白雲、鳥声などのある美しい自然界の夏景色が、新改訳では白一色の冬の雪景となったようなもので、地形の起状から同一の場所であることは判りましても、その与える感じは全く違います。それは、あまりにも洗練され、散文的説明となっているからです。」と反論している。同氏は特に日本語新改訳聖書について抗議しているが、これはそのままＮＥＢ訳にもあてはまる。問題となった６節の新改訳は、「主はすべてしいたげられている人々のために、正義とさばきを行なわれる。」となっている。ＮＥＢは、

The Lord is righteous in his acts ; he brings justice to all who have been wronged.

（主は御自身の業において正しい。彼は虐待されたすべての人々に正義を行われる。）

となって、新改訳よりももっときめこまかく説明する。

石浜訳は、

The executor of righteousness , Yeheweih. And judgments to all oppressors.

（正義を行う者、イヘイウエイ。またすべてのしいたげる人に対するさばき。）

同氏の反論の一部を紹介すると、「新改訳では、『主はすべてしいたげられている人々のために正義とさばきを行なわれる』と根本的に動的に改造しています。そして弱い、通俗的、無感動的なものです。この句の原文は一度読みますと、心の碑に記録せられて生涯忘れられない独特の聖句です。ところが新改訳のこの句は、何回読みましても聖書のどこにあったか、ほかに似た句があるために仲々覚え難いものです。」

われわれはヘブル語に特異な stative verb を忘れてはならない。ヘブルのコトバにおいてはギリシャのそれとちがって静止動詞は静止的でなく、それは静止の中にも動いているから、あえて動的に訳したとの反論があるかも知れないが、強いて訳すなら、『正義を行いつつある者』となるべきところであろうか。又、文と文との対偶性（Paralleism）を考えると、原典のままの姿こそ聖書翻訳のあるべき姿ではあるまいか。

むすびにかえて

魚返善雄博士はその著『言語と文体』の中で、「どんな種類の言語においても、また文語体・国語体・談話体などの文体を通じて見ても、とかく目につきやすく、また目にとめたほうが良いと思われる特徴の一つに対偶性（paralleism）がある。連続した話線において、二つ以上の形態的または意味的単位がならぶとき、もし語り手あるいは書き手にゆとりがあれば、人間の感情として

なるべく優美で力強い、すなわち印象的な表現をしようとする。それは言語本来の趣意にもかなったことである。言語社会の成員が各自その方向に努力を積みかさねているうちに、その言語独得の用語法すなわち語の選択と排列には、このようにしてできた一言語特有のものも多いが、他面また同系統の諸言語はもとより、系統を異にする諸言語の間にも類例の多く見いだされるものがある。それは人間精神の根本に、やはり多分に共通のものが存在するからであると見なくてはなるまい。……中略……

一定の格調も脚韻も用いず、ただ思想の反復、対照、総合等によって印象づけようとするヘブライ詩の方法は、イギリスのバラッドにもしばしば見られると同時に、原典の本文修正を試みる学者たちにも有力な手がかりを与えてくれる。」とさえ云っている。

又、ＮＥＢ訳で特に問題とされるのは、ロゴス性の無視である。即ち、３節の「あなたのすべての咎」「あなたのすべてのわずらい」を「私の……」と２人称を１人称に訳しかえていることである。１節，２節に出てくるmy soul（私が魂よ）というよびかけに答えたつもりであるが、３，４，５節は神からの答えとでもいうべきところ。ダビデが自分の体験から読者に自分の確信を告白しているところである。